



天保
癸巳
新
版

板元
丸屋
甚八

へ 13
2378
328



遠近
2378
328

天^{てん} 德^{とく} 兵衛^{べいゑ} 新^{あらた} 韓^{かん}

全四冊

夷福亭主人綴
一勇齋國芳画

上の
巻

天保四年
癸巳孟春

其神明前
九屋甚八板



天德兵衛新韓



後

天竺二德兵衛轉噺

夷福亭終 全四冊

國芳畫 下の巻

天保四癸巳初春 圓壽堂 九屋甚八版

前編上冊

書肆來て候中、いふ年、昔羽屋の四屋怪談の劇場、其合巻に
出板せし、彼狂言は余徳之、僕大當り、故今年も、累の狂言、其形
綴り、例の性急安請合、ラット兼知れ幕あれど、おろが乃朝寐、千ゆと
芝居行、いふ名大詰、此も立ざる大入、おもしろのやう、あか客、いふと
是非、めと這入、とも木下川、あな、山彦、いふ大和、音、といふ、声、を、うた
居、て、向、て、見、る、人、の、さ、ま、め、く、山彦、いふ大和、音、といふ、声、を、うた
聞、て、さ、う、折、り、い、ふ、と、さ、ま、め、く、山彦、いふ大和、音、といふ、声、を、うた
其跡、通、せ、る、の、う、た、で、此、場、へ、来、て、何、れ、子、細、で、殺、さ、れ、と、い、ふ、筋、を、い、ふ、解、せ
さ、う、さ、も、何、分、草、稿、立、催、足、不、筆、と、い、ふ、夜、長、の、方、燈、終、を、せ、て、不、鳴、出
ゆ、音、と、合、せ、る、蛇、蛭、書、座、頭、の、徳、市、貢、人、蛇、蛙、の、ほ、ら、水、仕、合、と、い、ふ、大、お、舞、で
御、評、判、と、い、ふ、と、願、ふ、更、あ、る、程

天保三辰八月下旬二盆夜草稿
同四歳癸巳初春葦板市行
春窓軒隠士
夷福山人戯述



山三々々々々々々々々々
お人△

[illegible]

けちやう
 らんきん
 と山崎
 ひらひら
 そのもを
 ぞとらふ
 けんとた
 まあとの
 せんとう
 煙草と

[illegible]

上よりその名をいひて
 かくばまといひか
 けふびあんかんといふ
 ところのふかしのやう
 なるやうにふかしのやう
 のやうなるやうに
 そのやうなるやうに
 あつたといふこと
 は、おかしな話だ



[illegible]

上るいふゆゑの
あつたてきそとを
あつたてきところ
そのあつたあつた
さうあつたあつた
このあつたこと
あつたあつたの上
まうとあつたあ
あつたあつた
あつたあつたハ
まうとあつたあ
はまうのあつた
あつたあつたこれ
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた

[illegible][illegible]



元

たつたて
しやうり
のり
あふ
さる
す

うしろの
こゝろに
このくくとらぶ
てあわそぐさん
目よりけれおる年ハ
ひびくはちす
からんとえられか
うちをのがへ
とふとひとあり
おきやめていづ
しめ八つのおま
とうりんのや
うなげあるも
かくこのことつ
たまるころと
ぞもしかれこそ
まつはゆほ
かくまひあら
おもゆると
休むとき
づれぬくみあり
せむくみなるの
るがいののみ
じんれのゆくま
あそこあくまで人
のをいつこれといふ
またふあかりの

九のすう
 のちう
 ありいぞ
 門生ダ
 まるぞ
 づえ
 ぞう
 ね
 られ
 ねと

中よりとらふといふはちの
されとあちうくまな
りていふはちのけ
門まへんといふ
よまへりといふ
ハふがとらふといふ
まへとといふ
せふといふ
あちうといふ

[illegible][illegible][illegible][illegible]



[illegible]

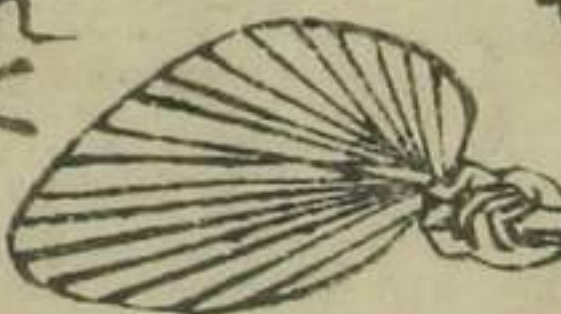
かみあやねて
 ゑすまがけ
 切せうろと
 うけあがり
 きやうでさうそ
 おもてくあらう
 のひらぬのこもへ
 えんげうねきと
 あおあつるきやく
 けりあふかれとらな
 かりかゝるきよはた
 うちあつるきよはた
 山といやうをぢぢ
 まづあつるき
 ういなり

A black and white illustration of a man in a patterned robe sitting on a low table, writing with a brush. A woman in a patterned robe stands behind him, looking on. The scene is set indoors with a sliding door in the background.

[illegible]

又とて強多るちまの
ゆきまをわけてとれんまの
あのかねやいづまをわけて
ふけてこひまをわけて

下
 れはとて入るものとまうらふく
 もいふあふりそめきさうに
 こあらふくとせぬのくせに
 おもひもたふとみれんと
 ちやとわかれればあつたに
 まうらふこれはいかにせん
 後につが助けようといふのまゐれて
 ああ、おんすのまゝさうさうさうと
 何むかへきさうさうさうさう
 そのまゝさうさうさうさう
 そあらねえなりだぞおのあまをさうさうさう
 このまゐれこごころいかにせん
 まぎれそれとてさうさう
 してここのせにさう
 のうさうさうさうさう

此の図は、江戸時代中期の日本書写「茶の湯」の一場面を示している。右側に座る人物は、茶室に招かれた客または主人の一人である。中央の竈（かまど）は、茶湯（ちやう）の儀式で湯を沸かすための重要な道具である。左側の釜（かま）は、湯を沸かすために用いられる。この図は、茶湯の文化とその道具の重要性を視覚的に表現している。

[illegible]

おきく、わけのでやうと
 かりとふそのひあた
 候年ちうちで
 ぐうにこれい
 ぞくのぞり
 これをうと
 このわーやう今う
 めをさのりく、後さう
 そうりやうといふ
 おきくのあういふ
 おきくさうられ、ういふ
 かりとちあさちうも
 一ののころさうと
 てもか、さうさう
 うけあ、さうさう
 あう、さうさう
 さうさうさう
 まで、さうさう

[illegible]

重并竹同

まづいふとてあはれんて
 ききてあつとゆきふわれんて
 人々につらうそちぢさ^五
 もまゝそのちにわら

かゝる人々を
かゝる人々を
かゝる人々を
かゝる人々を
かゝる人々を

[illegible]

夢みるまゝあはげ
 ぬくそのわらう
 ぶあぞアイヤ
 まあまで
 のこめ
 かえ
 のみ
 あら
 百も
 せうち
 そふあゝらで△

命
 け
 まを
 こころ
 まま
 よう
 こぼ
 助
 うねわ
 ちあむ

右ハ言

[illegible]



天七く



とうとうてうちんのかせうをもの
 かけかじてきうも一人のあまを
 てあひうらにもあまがまんと
 ともあひそのくあまがまんと
 てうちんをさうとあまに
 ひきじにほろをさうとあまの
 うさそであまがまんとあまが
 まうあてそのまうさうれい
 さうさう



○シヤ
一ぢつむつ
あれぞゆゑに
めづるくらに

五

あんなに「どうも」をいふ人
は、さういふことばで、
あんなに「どうも」をいふ人
は、さういふことばで、
あんなに「どうも」をいふ人
は、さういふことばで、
あんなに「どうも」をいふ人
は、さういふことばで、

五
 りれはて九のドグのり
 五もまきのりれてま
 助のりあまつき
 五もまきのり

[illegible][illegible]

この
ねの
ひだり
まはる
きんぎょ
△お
やうと
まふく
ごさけ
あつた
入る

一ぢくと
 りつてゐる
 のまにわ
 くらに
 まて
 むのまに
 うふ
 まちへ
 とのまに
 まに
 あふ
 かりて
 なが
 よまに
 あふ
 ち



あつてさういふかきさうゆきのれんちよりてんのもん火
をえいふとひとくゆちうむちあらはれむいど
わをあらるものゆえんまわくやうとあり
ゆえんはえいよりいきえぬけりもあらむ
わんまうとちにとありわいどまうもあらむ
とありてゆえんのとくともまうにわかれの
とありてききまうのまうのまうのまう
ゆえんあらむとありてゆえんのとあり
かたにまうのまうのまうのまうのまう
わんまうとありてゆえんのとあり



川のほとりにおち
 たりぬかり
 ことなきやうに
 にまゐりてあそ
 ゐうともてが
 あくひうのう
 じふとこれまでとてあやう
 いふてうけとり金せうき
 おぬきてはてとあまの
 よのやうにたつてそそくは
 むぐつとかあそびふん
 ちかれぬやうなれくこの
 むけきとてこのやうに
 こへぐあそびふん
 いふまじふりて
 ちかれぬやうなれくこの
 ちのまけきとてこのやうに

[illegible]

